

# 「人間の精神性、生と死を描くライブペイント」 （Weekly LALALA 703号掲載）

編集： Weekly LALALA - 2017年7月28日

## 「人間の精神性、生と死を描くライブペイント」

倉持 伊吹 | Ibuki Kuramochi

画家

日本を拠点に、ヨーロッパ、アジアなどを  
はじめとする海外で活躍する倉持伊吹さん。

舞踏とライブペイントを掛け合わせた

パフォーマンスで人々を魅了する。

その精神性などについて伺った。

WEBSITE <http://www.ibuki-kuramochi.com>

INSTAGRAM @ibuki\_kuramochi



画家といえば、キャンバスに向かい、風景や被写体を目の前に筆を走らせ作品を描くイメージが一般的だが、倉持伊吹さんにとって、キャンバスという定義は在って無いようなものだ。

今年の6月に日本で開催されたイベントで倉持さんがステージで披露したのは、三味線の演奏に合わせて、タテおよそ3メートルの巨大な白い布地に即興で作品を描いていく「ライブペイント」。オーディエンスが見守る中、一本一本のしなやかな線がしたためられ、まるでうごめく植物や髪の毛のように布地に作品が描かれていく、なんとも流動的でスピード感あふれるパフォーマンスアート。これまで日本を拠点にアーティスト活動を続けてきた倉持さんは、2016年に初めてフランスパリ・ジャパンエキスポでライブペイントを披露して以来、アジア、ヨーロッパなどに活動の幅を広げ、絵画と音楽を融合させたライブパフォーマンスを展開。昨年末からはライブペイントと舞踏を掛け合わせた舞踏イベントもパフォーマンスに取り入れた斬新なショーでオーディエンスを魅了する。

「即興で描くアートが好きですね。ライブペイントでは、コラボレーションする楽器や音楽によって絵画が変化したり、その場の空気を感じられ、その空間でオーディエンスと一体となれます。30分間というわずかな時間のパフォーマンスだからこそ、そこに力強いエネルギーがぐっと集結する。それが即興の面白さといえます」

原生体とエロティシズムを主軸テーマとし様々な形態で作品を制作する倉持さん。日本の美意識や宗教観を投影する作品たちは艶かしさを持ち合わせた「線」によって創造される。人間の精神性に問い

かけ表現する彼女のアート哲学はどのようにして生まれたのか。「アートに初めて衝撃を受けたのは、幼い時にみた日本画家、平山郁夫氏の作品『シルクロード』シリーズでした。その平山氏の絵画に出会った時の気持ちに立ち戻りたいと3年ほど前にも奈良の薬師寺を訪れました。そこには大壁画「大唐西域壁画」といって、壁一面が平山氏の絵で埋め尽くされ、空間全体を絵が支配している。その一つひとつに生と死、そして魂が宿り、そこにいると吸い込まれていくような感じ。それと同時に感じられる温かさや懐かしさ。自分も作品を作りながら、そんな感動をずっと追いつけているんだということに気づきました」

先日、パリ公演中のパリの電車の中で、なぜか頭に『石狩挽歌』が流れてきたという倉持さん。『♪雪に埋もれた番屋の隅で、わたしゃ夜通し飯を炊く〜♪』って、歌詞を口ずさんだ瞬間に、ああこんな悲しさかみしめる感情とか、哀愁は日本人独特のものだなあと。日本人の精神性を大事に描いていきたいなとふと思ったんです」。

倉持さんの作品『vayu』。溢れる風をイメージして創られた作品。（墨、パネル、ジェッツ 1,167×910cm）

パリ公演パフォーマンスの様子。身体表現とペイントの融合。

